

イサギは無意味なことをするのは幼い頃から好きだった。その時々によって、自分の好みの無意味な動作を見つけては、ひたすらそれを行っていた。そして母親にいつも怒られた。無駄なことをするのはやめなさい、と言われると、イサギはすぐにそれをやめた。ほとぼりが冷めると、別の動作を見つけて行い、怒られ、それを繰り返した。彼女が無意味なことをするのに意味はなかった。それに愛着もないので、くるくると動作を変えていった。彼女が一番気に入っていたのは、鏡の前に立って、自分の虹彩を観察することだった。黒くて底のない円を眺めることは、いくらでも時間を注ぎ込むことができた。しかしその動作も、イサギが入院してからは、ぼったりとやらなくなった。

入院している間は、音を立てずに歩くことに執心していた。歩調はいつもと変えずに、誰かに気づかれたくないわけでもないのに、病院の廊下をするりと歩き回った。音を殺して歩くことは、最初は難しかったものの、毎日挑戦することで、いまは造作もなくできるようになったので、イサギは満足だった。最初は駄目でも、練習を積み重ねればできるようになることを、彼女は再認識した。しかしその日は診察の時間が迫っていたので、少し急いで歩くことにした。

「まあ鬱病みたいなもんですわな」開口一番、医者は宣言したが、イサギは苦もなくそれを受け入れた。入院してからと言うもの、医者には何度もイサギが鬱病であると宣言していたからだ。

「それで？」医者はイサギの返答に多少わだかまりを感じながらも、そのまま続けた。

「それで……そうですなア、しばらく仕事は控えたほうがいいですな。あとはご家庭に連絡しておくべきですわ。とにかく一人にならんことです」

「わかりました」

「父さんが亡くなってしまっって、辛いとは思いますが、まあ思いつめ過ぎないようにしてくださいな」

「はい」

「……ちなみに、一人の時は何をしておいで？」

「……無意味なことをしますね、まあ私のすること全部、いつてしまえば意味のないことですけど。はは」イサギは乾いた笑い声をあげたが、医者は笑ってくれなかったどころか、表情を微塵も変えなかったので、損した気分になった。

「まあそれなら文句もないです。意味や効率を深追いするとあまりよろしくありませんよ、気楽に生活してください。おばあさんが病院の前に来ているそうなので、二人で帰るとよろしいですね」

「いえ、一人で帰ります」イサギは気だるげに右手で左手をさすった。

「……そうですか」

「はい、そうです」彼女は会釈をして、足音を立てずに部屋を出た。

二、

文字通り、イサギの生活は、ほとんど意味のないもので敷き詰められていた。大学を卒業してから、彼女は絵を描くことを生業としてきたが、それも無意味だとイサギは常々考えていた。そもそも絵で寿命が長くなったり、直接腹が満たされるわけでもないのだから、この文化は意味のないものだ、おくびにも出さずに、訥々とそのような思考を張り巡らしていた。のらりくらりと絵を売り、主にバイトで食いぶちをつなぎながら、二年間怪我も病気もなく過ごしてきたが、つい数日前に作業中に倒れ、入院していた。医者は心労が祟ったのだと言った。

病院を出てすぐ、イサギは電話をかけた。

「もしもし」

「お久しぶりです、草野さん、吉村です。ついさつき退院しました」

「ああ、それは良かった……。お見舞いの品、美味しかったですか？うちの実家で採れたものなんですよ」

「なんでしたっけ……。ああ、りんごだ、私ね、りんご苦手なんで、隣の部屋のポケた爺さんにあげましたよ」

「え？ああ、そうなんですね……」草野さんはあからさまに落ち込んだ様子だった。

「爺さん、だいぶ歯が欠けてましたけど、美味しかったです」

「そうですか……それは良かった……」

「ええ、とにかく心配をかけてしまっただけです。それで、展覧会っていつでしたっけ」

「……この前もそれ言いませんでした？」

「すみません、忘れました。ほら、倒れた後遺症で、少し記憶があやふやになってしまっただけ……」

「四月の九日ですね。三月の末には完成していて欲しいです」草野さんは相変わらずちよろいな、とイサギは一人でほくそ笑んでいた。

「ありがとうございます」

「間に合いそうですか？」

「さあ、どうでしょう？今の私にはわかりやしませんから、三月ごろの私に訊いてください」

「そんな無責任な」

「やるだけやりますから、お楽しみに……」草野さんの嘆きが聞こえてくる前に、電話を切った。

次に、イサギは祖母に電話をかけた。入院していたことは、祖母には伝えたが、母親には言っていなかった。祖母はまだ近くにいるだろうが、イサギは直接会おうとしなかった。

「もしもし、イサギです」

「あら……ヤスコちゃん？」

「違います、イサギです。ほら、孫の」イサギの祖母は人の名前を覚えるのが苦手な上に、最近年をとっていたので、記憶もあやふやになっていた。イサギは祖母のあしらい方を心得ていたので、適当に流した。

「ああ、ヒサシくんね……。もう大丈夫なの？」

「はい、ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」

「あんまり無理したら駄目よ、まだ若いんだから……。それに父さんを殺した犯人も見つかっていないんですよ……」

「今日は別件で電話をかけたんですが、この前仰っていた別荘ってのは、自由に使ってもいいんですか？」

「別荘って言ってもただの掘っ建て小屋だし、おじいちゃんが亡くなってから使っていないから薄汚れてると思うけど、大丈夫よ」

「ありがとうございます。しばらくそちらで絵を描きます。三ヶ月後に展覧会があるんです」

「……入院したことは母さんに言わなくていいの？」

「はい、問題ないです」

「そう……一人で帰れる？」

「大丈夫です。それじゃあ、おばあちゃんも元気で」電話を切ったら、寒さで身体を震わせた。

荷物は少なかったもので、荷仕度はすぐに終わった。バイトを辞め、アパートの鍵を家主に預け、車に乗った。別荘は確かに掘って建て小屋だった。人気のない森の中に一つ、ポツリと建っていた。木造の一軒家で、風が吹いたら倒れそうなほど脆く見えた。数日前に降った大雪は全く溶けずに、森は白くない地面を探すのが難しいほどで、薄ら寒い光景を作り出していた。

イサギは落胆したようにため息をついた。小屋自体には文句はなく、むしろ申し分もない場所だと感じたが、それと同時に、ここではない、という静かな確信をしていた。仕方がない、とイサギはすぐに切り替えた。荷物を下ろして、一度浅く呼吸をした。空気は埃くさかった。すぐに馴染むだろう、とイサギは左手をさすりながら、妥協を始めた。

小屋の中は虫の死骸と埃が転がっており、掃除が終わる頃には日が暮れていた。小さな個室に仕事道具を置いた。車を十数分走らせたところにあるコンビニで食料を買った。小屋の周りには小さな池以外、ほとんど何もなかったが、彼女はそれでも十分満たされていた。

一昔前の香りがする敷布団を引いて寝転がり、イサギはこれからのことを考えた。しばらくそのまま自分の身体を、小屋の空気に馴染ませていった。イサギは恐ろしいほどの速さでその空間に適応していた。いつそ腹の底から声をあげて笑おうかと考えたほどだったが、我慢して微笑程度に抑えた。その我慢をできるのも、この空間のおかげだ、とも思った。そのままイサギは眠り始めた。

#### 四

朝日が小屋に差し込み、イサギが最初に気づいたことは、恐ろしいほどの寒さと、洗面所の鏡がごっそり剥がれていることだった。それ以外にも、壊れた部分には小屋中に見つかつた。吐く息を白くさせながら外に出ると、凍った池のほとりに立った。凍った池に辛うじて見える自分の顔を眺めた。氷はくすんでいて、鏡の役割などほぼ果たしていなかった。

次の展覧会の趣旨は、若い絵描きの自画像を集めることだった。イサギは自画像を敬遠していたので、展覧会に出展することを渋った。自画像なんかじゃなくて、普通の写真にすればいいと思いますよ、ほら、私の二歳下の、カコちゃんだっけ？そう、抽象画よく描く子、あの子なんか可愛いし、若いし（現役大学生でしょ？）、スタイルいいし、男にモテそうだから、写真を展示した方がいいと思いますよ、と草野さんに言ったら、そこをなんとか、ほら、吉村さんだったらできますよ、と、泣きそうになりながら嘆願されたので、引くにもひけず、結局引き受けた。

おにぎりを二つ、腹の中に納めた後に、イサギは鉛筆とスケッチブックを持って外に、そのそ歩き出した。イサギは昆虫だとか動物だとか、動くものが苦手なので、人間の顔も嫌っていた。イサギにとって人間の顔とは、四六時中形を変え、不気味に蠢くものだったので、できれば見たくない代物だった。そのせいなのか、イサギは自画像を描こうとしなかった。鏡で自分の顔を見ることがすら嫌だった。

積もっていた雪を払って、倒木に腰をおろして、葉のない大きな木をスケッチし始めた。鉛筆を紙の上で動かすことで、寝ぼけた頭をゆっくりとかき回しながら、自画像のことについて考えた。

別段、イサギは容姿にコンプレックスを抱いているわけでもなかったが、人間の顔の次に嫌いなのは鏡だった。入院してからは一度も使ってすらない。しかし子供の頃は母親に強要されて、鏡をよく使った。女の子だとか、男の子だとか関係なく、身だしなみだけは常に整えなさい、という母の言葉を今でも覚えている。左手をさすった。座っていると肌寒くなってきた。

イサギは、自画像をどうやって描こうかしら、と考えながらも、ひたすら手を動かして木々のスケッチをやめなかった。イサギ自身はそれを「思考の垂れ流し」と呼んでいたが、それは彼女が集中している証拠でもあった。考えているうちに、携帯電話の着信音が鳴った。

「はい、吉村です」

「スグリです」名前を聞いて、すぐに電話を切ろうかと思った。

「あ、切らないでね。すぐ話終わるからさ」

「……何の用？」スグリはイサギの許嫁だった。イサギの母親が、何処かから見つけてきた婿で、しつこくまとわりついてきて、ストーカーのようなこともざらにやっていたが、イサギは結婚する気は毛頭なかった。

「君の父さん殺したやつ見つかった？」

「……まだ」

「手がかりとかはないの？」

「……犯人の顔を私は見てる」

「じゃあ、すぐ見つかるんじゃないの」

「……残念なことに思い出せない。だけど、その人の顔を見たら、犯人だと絶対にわかる自身はある。それだけは不思議と確信してる。もちろん、犯人と顔を合わせない限り、手がか

りはゼロだけど」

「そう、そら残念だ」スグリ自身が訊ねてきたのに返事が適当だったので、イサギは益々苛立った。

「僕がプレゼントした靴、まだ使ってる？」

「……そういえば今も履いてる」スグリに貰ったことすら記憶していなかった。

「へええ、嬉しいなア、それは都合がいいや。まあ僕の都合なんてどうでもいいか。入院は何日間してたの？」

「……わからない。というか忘れた」それは誤魔化しではなく、本音だった。イサギは、何日間あそこにいたんだろうかと、思い出そうとしたが思い出せなかった。

「辛いだろうけど、無理しないようにね。僕はいつでも話を聞くよ」スグリの言葉は全て軽く聞こえた。

「もう医者に似たようなこと言われたよ。それに、いつでも話を聞くって言う奴にまともな人間はいない。しかもあんたはもう関係ないでしょ」

「いやあるさ。ところで今どこにいるのさ」

「教えない」

「そう？じゃあ、偶然会ったら、またお話できるといいね」そう言って、スグリは電話を切った。スグリにしてはやけにあっさりと引き下がったな、とイサギは引っ掛かりを感じた。

## 五

次の日の朝、小屋の前にスグリがいた。イサギはスグリを甘く見ていたことを痛感した。

「ちよつとそこで車が雪で動けなくなっちゃってさ、まあ助けを呼ぼうと思ってこの小屋に来ただけだよ、偶然会えたね」返す言葉も見つからないイサギに、畳み掛けるようにスグリが口を開いた。

「もう一人、お客さんを連れてきたよ」と言って小さな男の子の手を引いた。

「……俊くん？」俊くんというのは、イサギの姉の子だったが、あまり面識はなかった。

「君の母さんに言われて、しばらく預かってるんだけど、遊んで欲しいってさ」

「私は遊ぶために、ここに来ているわけじゃない」

「少しの間でいいからさ、面倒みてやってよ。ほら、俊くん、おねえちゃん、遊んでくれるって」と言って男の子の手をイサギに渡した。俊くんは恥ずかしそうに、スグリの足に身を寄せた。さすがはストーカーだ、図々しさが桁違い、とイサギは心の中でスグリを賞賛した。

## 六

俊くんは穏やかな子だったが、すぐに打ち解けた。イサギは頑固な子だったが、打ち解けざるを得なかった。三人で雪合戦をして、数時間遊ぶと、汗だくになって雪の上に倒れた。俊くんが楽しそうなので、イサギは絵を描く作業に戻るのも憚られ、結局遊んでしまった。しばらく雪の感触を背中で楽しんでいたが、すぐに不愉快な気持ちになった。イサギはスグりに、この空間が支配されていることが気に食わなかった。

「……どうやって、ここだって、わかったの？」息切れをして、イサギはうまく喋れなかった。

「企業秘密だね……。僕の、本業は、ストーカーだからね……」軽く息を弾ませながらスグリが言った。

「そういう君は、なんでここに来たの？」イサギは必死にその場を取り繕おうと思ったが、言葉に詰まった。

「……別に、理由はない」

「君の好きな、無意味、だね」

「そう、まあ、そういうこと」

「嘘つけ、また死に場所を探してたんだろうに」雪が木から落ちる音が、遠くから響いた。

「いつものことだ、君は直感で動くから無駄が多いし、無意味なことも自然と多くなる。この前使ってたアトリエだって、あそこで自殺しようと思ってたことぐらい分かるさ。今回のここは、なんだろうね、……昔の思い出の場所かな？そこに来てみたものの、ここじゃないと直感したわけだ。それでまた次の場所を探そうとしてるんだけど、もう思いつかない。今は、そうだね……ここでもいいかもしれない、悪い場所じゃないし、人気もない、ぴったりじゃないか……と妥協し始めた頃かな？あんまりストーカーを舐めないほうがいいよ。妄想と追跡なら、誰にも負けないぜ」イサギは押し黙った。全てを見抜かれていることを知って、少なからず落胆した。スグリは口調を変えずに淡々と話した。

「僕は君が死んでも構わないけど、君の嫌いな母さんが知ったら、なんて言うんだろうね……あの人が死んだら、自分の子が自殺した恥ずかしさのあまり、墓も作ってくれない上に、君が存在したことを鼻から否定し始めるだろうね」確かに、母さんならやりかねない、とイサギは想像して、笑ってしまった。

「これからどうするの？」スグリの質問に、イサギは困った。やりたいことは何一つなかった。

「……とりあえず、絵を完成させてから、考える」

「無難だね」

「あんたはどうするの？」

「君が死んでも死ななくても、親の会社を継ぐことは変わらないから、僕は君と結婚するだけさ。僕の親と、君の母さんが決めたことだから、僕はそれに従うだけ」

「なんでそんなに簡単に受け入れられるの？」スグリはしばらく黙って考えた。

「なんでって……、もう産まれた時から決まっていたことだからさ、そうやって育ったんだから、当たり前だろ？僕にとっての常識だからだろうね」イサギは何故か物悲しい気分になった。

## 七

スグリと俊くんが来たことは、少なからずイサギの助けになっていた。スグリがイサギの死を気にしないと言いながらも、自殺をさせないために来たのは、イサギにもわかってはいたが、それは口に出さなかった。三人で遊ぶ時間は毎日作っていたが、絵を描く時間も確保していた。三人で数日間暮らしている間に、イサギは自分でも知らぬうちに心を許していた。俊くんはいつも八時になると床についた。夜の二人きりの時間になると、イサギとスグリは黙ってコーヒーを飲んだり、本を読んだりとお互い思い思いのことをしていたが、そこに会話は存在しなかった。静謐な時間を毎夜作っていたが、三人はそれで満たされていた。

ある日、俊くんが眠った後に、イサギが話した。

「……この季節に、オタマジヤクシっているかな」スグリは本のページをめくる手を止め、顔を上げた。

「いないと思うけど、なんで」君から話しかけるなんて、珍しいね、と茶化そうと思ったのを、スグリは押しとどまった。

「昔ね、おばあちゃんとこの小屋で過ごしたときにね、池でオタマジヤクシを見たの。おばあちゃんが、これはモリアオガエルのオタマジヤクシだって教えてくれたのを覚えてる」やっぱり昔の思い出の場所じゃん、という突っ込みをスグリは再び押しとどめた。

「オタマジヤクシの種類の名前まで、よく覚えられるね」

「そう、何故か今でもずっと覚えてるの。モリアオガエルでもなくて、オタマジヤクシでもなくて、モリアオガエルのオタマジヤクシ、っていう言葉を、ね……それでここに来たんだけど、池は凍ってるし、生き物はどこにも居ないし……」スグリがこらえきれずに吹き出した。



「当たり前じゃん、冬なんだし。イサギちゃんって、変なところで抜けてるよね。」名前を呼ばれたことに、イサギは総毛立った。何故なのかはわからなかった。イサギは自分の名前を呼ばれることを恐れていた。

「まあ、土を掘り起こしたら、冬眠してるカエルぐらいならいるだろうね」スグリはまだ笑い続けていた。イサギは笑われたことに拗ねて、もうスグリに耳を貸そうとしなかった。

## 八

三人で数日間過ごしていると、イサギは自分の性格が変わっていることに気づいた。昔よりずっと、明るく、丸くなっているような気がして、むず痒くなった。それは心地の良い変化ではあったが、未だに真っ白なキャンバスと、ページが無駄に埋まっていくスケッチブックを見るたびに、ずっと本来のイサギに引き戻された。真っ白な、動かない一つの画面には、自然とイサギの暗さを思い起こさせるほどの魅力があった。魅力と言えるほどに、かつてのイサギはその孤独に酔い、溺れていた。今、イサギの中では現在と過去が混濁していた。少しずつ現在のイサギが大きくなりながらも、それに押しつぶされそうな過去のイサギの呼吸音を、身近に感じていた。ゆつくりと、緻密に自分が変わっていく、過去が飲まれていく感覚を体感して、イサギは、人を殺す感覚はこれに近いのかもしれない、と薄々考えていた。ある日、小屋の物置の隅から、俊くんがスコップを発見した。スグリはとても嬉しそうな顔をして、宝探しをしよう、と言った。

「何を探すの？」俊くんが質問すると、スグリは嬉々として答えた。

「冬眠中のカエル」イサギはカエルに同情した。

こんな寒い日に叩き起こされるなんて、可哀想に……と思ながらも、イサギはカエル探しをちゃっかりと楽しんでた。数時間ほど池の周囲の土を掘り返していると、カエルは見つかった。茶色くて大きなカエルは動かなかった。

「動かない」俊くんが言った。

「動かないね」イサギが返した。

「死んでるのかもね」スグリが何気無く言った。

「……このカエル、本当に死んでない？」イサギが心配そうな声で言った。スグリも心配したのか、カエルに触ってみた。

「カエル、死んじゃったの？」俊くんが泣きそうな声で言った。

「……」気まぎらくなって、スグリは何も言わなかった。カエルの腹の下に、イサギは骨を見た。スグリがカエルの体をひっくり返すと、腹が空っぽだった。鳥に身を食われたのだろう、

ぽっかりと穴が空き、骨がむき出しになっていた。

カエルの死骸を池に帰そう、とスグリが言った。

「まだ凍ってるよ」俊くんが池を指差した。

「割ればいい」スグリは大きな石を拾い上げて、池に向かって投げた。ものすごい音を立てて、池の氷は割れた。水しぶきが飛び散って、短い叫び声をイサギはあげた。

まだ波打つ水面に三人で近づいて、スグリはカエルの死体を池に滑り込ませた。じっと沈んでいく物体を眺めた。もしかして、私たちが掘り起こしたことで、カエルは死んだんじゃないか、と訝っていたが、すでにカエルが食われていたことに、骨が出ていることで気づき、イサギは安心していった。そして安心した自分に心を痛めた。安心するなんて、自分がカエルを殺しているのと一緒にだと、イサギは思った。私が過去の私を殺すように、もしかすると、スグリも自分の中の何かを殺しているからこそ、理不尽なことを受け入れられているのかもしれない、と、その時イサギは、数日前に思いもしなかった考えに至った。

「カエル、天国に行ったかな」俊くんがべそをかきながら言った。

「大丈夫さ。な、そうだろう？」スグリはイサギに意見を求めたが、返事はなかった。イサギはその時、既に別のものに心を奪われていた。

イサギは水面を見ていた。波紋が次第に収まり、水面に映り込む自分と目があった。

「水鏡だ」と、イサギは思わず呟いた。イサギは反射的に立ち上がって、憑かれたように小屋に向かって歩いていった。

スグリはイサギの行動に理解ができなかったが、俊くんはイサギの行動ではなく、言葉に心を奪われていた。祖母のモリアオガエルのオタマジャクシという言葉、イサギが覚えていたように、イサギの水鏡という言葉、俊くんはその時記憶した。その言葉の伝承に意味はない。無意味を愛するイサギの言葉であるからだ。

## 九

小屋の中の一室に閉じこもって、イサギは「思考の垂れ流し」を行っていた。今度は、野草のスケッチではなく、自画像の下書きをいくつも描いた。自画像が描けないのならば、鏡がないのならば、代用品を描こうと、イサギは思った。私は鏡を見てはいけない、鏡は動かない、一枚の絵として完成しているからだ、と母親の忠告のように、自分に言い聞かせた。小屋に住み始めて数ヶ月、手をつけていなかったキャンバスに、初めて筆を侍らせた。

夕飯も食べずに、イサギは絵を描き続けた。俊くんが寝息を立て始めた頃に、筆をおいた。腕時計に視線を移した途端、疲労を手取るようにして感じた。スグリが紅茶を持ってき

た。

「ありがとう」スグリにお礼を言うのは初めてかもしれない、とイサギは思った。

「調子はどうだい」小さな椅子に腰をおろして、スグリが訊ねた。

「まあまあ、かな」

「まんざらでもなさそうな顔してるけどね」とスグリが言うと、イサギは照れを隠すようにして傍に顔を向けた。

「これから、どうするの？」二度目の質問だ、とイサギは気づいた。

「……あんたとは結婚するつもりはない。それに、私たちがどういう関係なのかもよくわからない。あんたはわかる？」

「僕はどういう顔をしてる？」イサギはスグリの質問の意図がわからなかった。

「……わからない」イサギの返答に、スグリはため息を漏らすようにして笑った。

「僕たちの関係なんて、そんなもんさ」わからないことだらけだ、とイサギは独り言ちた。水面に起きるさざ波のように、二人で静かに乱れていった。

## 十

絵の出展の締め切りが近づいていたが、イサギは落ち着き払っていた。イサギは池のほとりで作業をするようになった。春が近づき、池の水は溶け、柔らかい風に波を作った。

水鏡は、動く鏡だった。人間の顔のように、それは形を変え続けていた。顔と水鏡を少しずつずらして、互いを飲み込ませるようにして、自画像に近づけていった。相殺し合うその二物の相性の良さを、イサギは発見した。イサギが無意識のうちに理解したのは、自分自身であるということと、鏡は動いていなければいけない、ということだった。イサギは自分の変化にはつきりと気づいていた。一方のスグリは安心していった。イサギの自殺の心配もないだろうと、心を落ち着かせてイサギを見ることができるようになった。

絵の完成はあっけなかったが、イサギは心底安堵した。明日には草野さんに届けよう、と決心しながら、よたよたとキャンバスを持って小屋に戻っていった。石に蹴躓いて転びそうになったところを、スグリが支えた。

「おつかれさん」とスグリが言ったが、イサギはものも言えないほどくたびれていた。かうじて口角をあげた。イサギはその夜、カエルの冬眠のように深く眠った。

## 十一

車のエンジン音でイサギは目を覚ました。あたりはまだ暗かった。黒い暗幕で覆われているような視界の中で、車のライトが目突き刺さり、とっさに布団を被った。布団の温もり

に再びとろけそうになったその束の間、布団を剥がされた。イサギは誰かがそばに立っているのを見た。それからのことはあまり覚えていなかった。

次に目を覚ました時は、再び夜だった。何時間寝ていたのかわからなかったが、ちゃんとしたベッドに、ちゃんとした家の中にいるのを少しずつ認識した。見覚えのある景色の中で、扉が開いた。

「おはよう」母親だった。イサギはカエルの気持ちを理解した気がした。

## 十二

母親は無駄な動作一つせずに、ベッドの脇の椅子に座った。

「イサギ」母親に名前を呼ばれて初めて、イサギは絶望を感じた。それまではどうにかなるかもしれない、と楽観的に物事を考えていたが、どうにもならない事をわかってしまった。

「こつちを見て」イサギは母親の目を直視できなかった。

「こちらを見ることができないの？」

「いえ、できます」イサギは母親の方に顔を向けた。

「できてないわ、目と目を合わせないと意味がない」無意識のうちに右手で左手をさすった。突然母親が右手を伸ばし、イサギの顔をつかんで、無理やり目を合わせた。

イサギが一番気に入っていたのは鏡の前に立って、自分の虹彩を観察することだった。黒くて底のない円を眺めることは、いくらでも時間を注ぎ込むことができた。しかしその時のイサギにとって、母親と目を合わせることは苦痛でしかなかった。

「人の目が見ることが出来ないのね」イサギは動悸が早くなっていくのを感じた。

「病院でおばあちゃんに会わないで、わざわざ電話したのはなんで？」イサギは言い返せなかった。

「スグリ君がどういう顔をしているのか、わからなかったのはなんで？」これまた言い返せなかった。母親は手を離れた。手を離す仕草が優しすぎて、イサギは恐怖を覚えた。

「だいぶ待ったわ」今度は母親の方が顔をそらして、語り始めた。

「あなたの絵の完成を待った。随分と長かったけど、これでもう終わりね」

「……」

「スグリ君も別に乗り気で協力したわけじゃないのよ。だけどあの子正直者だから、すぐ従ってくれる。あなたの婿にふさわしい、良い子だわ」

「……」

「今日で絵を描くのはもう終わり。結婚の準備ももう出来てるわ」

「……絵は？」何も言えなかったイサギは、やっとの思いで言葉を発した。

「……何の絵？」

「……私が、描いた絵。昨日、完成した絵、と、この部屋に飾ってた、絵、全部」イサギはたどたどしい言葉を、必死で繋いだ。その部屋はかつて、イサギが描いた絵が飾られていた。部屋は綺麗に整理されていたが、イサギが描いた絵は一枚も残っていなかった。

「もう終わったのよ」

「……」

「思い出してごらんさい、私の今までの忠告を……。私が今までに、間違ったことを言ったことはある？」母親は席を立て、部屋を出た。イサギは母の忠告を思い出した。母の言葉は全て、正しいわけではなかったが、間違っていなかった。イサギは、私が間違っていたのだと、するりと腑に落ちた。再び枕に頭を預けて、眠りに落ちた。自分の中の二つの部分が、乖離していくのを感じた。

### 十三

真夜中にイサギは目を覚ました。もう何度目の夜なのかすら、わからなかった。長い間飲まず食わずで眠りこけていたことを思い出すと、無性に喉が乾いたので、おぼつかない足取りで部屋を出て、洗面所に行った。コップに水を注いで一杯飲むと、鏡に映る自分と目があった。その時イサギは、自分作った暗黙の制約を破ってしまった。イサギは止まっている鏡を見てはいけなかった。コップが右手から滑り落ちた。

イサギが動く鏡、水鏡であるとしたら、その時の状態はまさに合わせ鏡の状態だった。顔を合わせた状態になった二つの鏡は、特別なものを移すわけでもなく、無限に鏡を映し始める。イサギは合わせ鏡になることで、自分の間違いに気付いた。

自分が鏡のではなく、自分の名前が鏡なのだと悟った。母親に、スグリに、イサギは名前を呼ばれる事を恐れていた。イサギは、自分が怖がっていたのは顔ではなく、静止した鏡でもなく、名前なのだと理解した。

数秒遅れて、イサギはコップが床に落ちて割れた音を聴いた。イサギは異常なほどに落ちて着き払っていた。なぜなら母親に、自分が間違っていることを、事前に指摘されていたからだ。母さんのいう通りだ、私は間違っていた、と、イサギはごく自然に自分の間違いを認めることができた。幸か不幸か、母親のおかげで、イサギは衝撃に耐え、冷静を保つことができた。

家のどこかで扉が開く音がした。母親が起きたのだろう。イサギはコップの破片を拾い上

げて、洗面所を出て、長い廊下を歩き始めた。廊下には均等な距離を保って、片手で掴めるほどの小ささの石像が並べられていたが、それ以外は味気なく、合わせ鏡のように無限に同じ風景が続いた。石像は父親のものだったが、既に亡くなったのだから、いまにきつと母親が捨てるのだろう、とイサギは哀れんだ。少なからず石像を気に入っていたからだ。イサギは廊下を歩くことを楽しんですらいいた。無限なものに意味を見出すことはできないからだ。

母親に後ろから肩を掴まれて、イサギは立ち止まった。

「……どこへ行くの？」

「母さん、私、今まで間違ってたみたい」

「どこへ行くの？」

「戻らないと。あの場所は間違っていたの。間違っていたのは、私の直感だった……」

「……俊くんやスグリ君と過ごしていたのに、何も学習してこなかったみたいね」他愛ない動作でイサギは右手で石像をつかんで振り返った。躊躇なく、母親と視線を絡ませることができた。

#### 十四

イサギに名前を与えたのは母親と父親だったが、名前を所有しているのもまた彼らだった。何度もイサギは自分の名前から脱しようと、自ら死のうとしていたが、悉くそれを阻止されていた（主にスグリがイサギの居場所を突き止め、阻止していた）。ならば発想を逆転しよう、イサギは目論み、名前の主を断とうとした。母親を石像で痛めつけながら、イサギはその感覚に既視感を覚えた。父親を殺した時の感覚と似ていた。イサギは間違いを認めながらも、自分が間違っていないことも理解した。鏡を見てしまったら、誰が父親を殺したのか、犯人の顔を覚えていたので、わかってしまうのを防ぐために、イサギは無意識のうちに、入院してからというものの、頑なに動かない鏡をみようとしないかった。イサギは自身の直感を理由も無しに信じた、自分自身に感謝した。イサギの直感は、ある部分においては間違っていないかった。

#### 十五

廊下は照明がついていなかったので薄暗く、あまり周囲が見えなかったが、だんだん夜目がかきいてきた。母親の腹にカエルのような穴を開けたが、流石に骨は見えなかった。黒くて底のない円を眺めることは、いくらでも時間を注ぎ込むことができたが、その場を立ち去ることにした。母親が事切れると、イサギは名前を失った。

かつてイサギだったその女は、洗面所で手を洗った。顔をあげると、動かない鏡がそこに

あった。動かないのだから、そこにあるのは当たり前のことだが、それが何故かおかしくって、女は少し微笑んだ。自画像が完成する前に、動かない鏡を見なくてよかったと、再び心の底から安堵した。鏡は一枚の絵として完成しすぎて、私が手を加える隙がない、と思いがらも、惚れ惚れとしながら女は鏡を観た。美術館で名画を鑑賞するように、女は鏡に惚れ抜いていた。しばらく堪能した後、女が顔を背けると、合わせ鏡は消え失せた。

スグリからもらった靴を脱ぎ散らして、女は無限に続くように思える廊下を歩いた。女の顔はもはや動くことはなかった。女は足音を立てなかったが、耳を塞ぎたくなるほどの静寂を、裸足から発していた。その静寂こそが足音であると言えるのであれば、十分すぎるほどの響き渡り、寝静まる人々の耳に届いているのだろう。安息を求めて、女は廊下の奥へと消えていった。やがて女の足音は消え、廊下には埃のように静寂が積もりはじめた。